

## 随 筆

### 断章映画館

—2018年9月23日—

高橋 正樹

今年見た印象深い映画は、インド映画の「バーフバリ」でした。この映画は二部作で構成されており「バーフバリ 伝説の誕生」(2015年)、「バーフバリ 王の凱旋」(2017年)からなっています。

インド映画にはなじみのない方が多いのではないかと思います。しかし、これがなかなかおもしろいのです。脈絡があまりないのに突然歌と踊りが始まったりします。私達が知っている映画の骨格と趣が少し異なりますが、しかし、馴れるとこれがとても楽しいのです。さすが8億人の民を楽しませるコツを心得ていると感心させられます。インド人の方に伺うとそのような場面では皆さん踊り出したり、映画館は大騒ぎだとのことでした。

私が子供だった頃(日本が貧しかった頃)、特に美空ひばりの映画などでは、突然歌が始まったことを思い出します。映画は内容によってはかえってストレスが増すことがありますから、娯楽を求めてやってきた大衆の癒やしには、歌と踊りを挟むのは欠かせないのかもしれないかもしれません。

「バーフバリ」はインドの叙事詩をベースにしていると考えられています。VFXが凄いのですが、実に自然で違和感なく伝説の世界を実現していました。インド映画もついにここまで来たのかと思わせます。ちなみに、この映画は私達の知っているボリウッドではなく、トリウッドで制作されているとか。トリウッド?、と思い調べてみましたら、インドではボリウッド、トリウッド、コリウッドの3つがあり、ボリウッドは最もメジャーで、ムンバイで制作されるヒンズー語の映画、トリウッドはハイドラバードで制作されるテルグ語の映画、コリウッドはチェンナイで制作されるタミール語の映画とのことでした。

映画の各シーンが何処かで見たような構図に見事にはまっております(古い美術品?、日本マンガの影響もあるのでは?、とも思いましたが・・・)。ユング心理学では、私達には無意識に存在する原像というのがあって、これは民族の神話などにも現れているといわれていますから、あるいはこの何処かで見たような象徴的な構図は、伝説の世界に無理なく感情移入できるよう潜在意識に働きかける役割を担っているのかもしれないかもしれません。

「バーフバリ 王の凱旋」にはインターナショナル版（141分）と完全版（167分）があるとのこと。私が見たのはインターナショナル版でしたので、完全版を見てみたいとアマゾンなどネット上を探しましたが、発売されておられません。インターナショナル版上映後、高まる要望に完全版が上映されたのですが、それとともに、「絶叫上映」（上映中の発声や鳴り物、コスプレが許可される）や「爆音上映」（音楽ライブ用の機材などを使用する）等がおこなわれたとか、日本各地で「バーフバリ！ バーフバリ！」と叫ぶ「マヒシュマティ王国民」が増殖している、などと書かれたものを見ますと、熱狂的な一部のファンに受けているように思いがちですが、しかしストーリーは親の敵を息子が討つ、それを支える忠臣がいるという、私達日本人が大好きな忠臣蔵にも通じる伝統的な仇討ちものですし、わたしは、昭和40年代、全学連全盛の騒然とした時代に、高倉健のやくざものを深夜映画館で見ましたが、我慢に我慢を重ねた上、池辺良と連れだってなぐりこみに向かって歩くシーンに鳴り響く「唐獅子牡丹」に合わせ、「意義なーし」と騒然となる館内に相通じるものがあります。来日したラージャマウリ監督によりますと、「世界各国で上映したが、館内を埋めるのはその国に在住しているインド系の人が大部分だった、しかし、（満席の館内を見て）日本は館内ほとんどが日本人だ、凄い」、と言わしめたようです。仇討ちものは日本人の血を騒がせる何かがあるのかもしれませんが。

さて、1954年（昭和29年）は所得倍増計画の発動前でしたが、日本経済は朝鮮戦争特需で立ち直り、子供心にも前向きの何かと明るく希望にあふれた時代であったように思います。街角に立っておりました傷痕軍人も以前に比べあまり見かけなくなっていたように思います。父は名大放射線科の開講で弘前から名古屋に移っておりましたが、母は相変わらず寝たきりでしたので私は母と一緒に母の実家の福島に住み、祖父母や叔父夫婦の世話になっておりました。父は名古屋で「佐藤さん」と言うお宅に下宿していたようです。

母の実家は福島駅の広場から一つ道を入った繁華街にありました。渡辺正吉商店、通称「渡商（わたしょう）」、建材や石炭、コークス、などの燃料を扱っておりました。お店の前の路地を挟んだ一区画向こう角に少し大きな映画館がありました。映画館の名前は「国際映画」と言いました。子供の頃映画館がすぐそばにあったわけで、映画を身近に感じるきっかけになったようです。住宅街に住んでいればこうはいかなかったでしょう。この映画館では主に子供向けの映画しか見ておりませんが、ポスターや看板はいやでも目に入りました。映画館前の少し広いアプローチを歩いて映画館のウィンドウに飾られているス

チール写真を見に行くのが楽しみでした。スチール写真を勝手につなぎ合わせて、どのような映画だろうかと想像を巡らしておりました。

1954年（昭和29年）は映画全盛期でした。ちなみに日本の映画観客動員数は1958年（昭和33年）の11億人強を最高に、急激に下降していきます。この年の映画は名作が多く、木下恵介監督の「二十四の瞳」、黒澤明監督の「七人の侍」、溝口健二監督の「近松物語」、「山椒大夫」、成瀬巳喜男監督の「山の音」、「晩菊」などですが、「ゴジラ」「宮本武蔵」などもこの年に上映されており、興行成績はそれぞれ7位と8位でした。「宮本武蔵」は稲垣浩三監督、三船敏郎主演の三部作品第一作で、1961年（昭和36年）の内田吐夢監督、中村錦之助主演の5部作「宮本武蔵」とは違いますが、アカデミー名誉賞（外国映画賞）でオスカーをもらっています。

外国映画はオードリー・ヘプバーンの「ローマの休日」（ウィリアム・ワイラー監督）、「麗しのサブリナ」（ビリー・ワイルダー監督）、エリア・カザン監督の「波止場」、マルセル・カルネ監督の「嘆きのテレーズ」、ルネ・クレマン監督の「しのび逢い」などなど、豪華絢爛でした。

街には春日八郎が歌った大変調子の良い「お富さん」が大きな音で流れておりました。パチンコ屋が景気づけに流しているもので、それまでは軍艦マーチが定番だったのですが、この年（1954年8月）に発表された「お富さん」は何とも陽気で明るく、パチンコ屋の景気づけにはうってつけだったようです。それもそのはず、作曲者渡久地氏の弁によると「四分の四拍子のリズムのなかに八分の六拍子をアクセントとして加えたブギウギのリズムを基に、手拍子や軽快なヨナ抜き音階など沖縄音楽・カチャーシー（手を上げて踊る沖縄の踊り）の要素と、チンドン屋のリズムの影響を受けた奄美新民謡の要素を織り込みながら曲を書いた」とのこと。なんとも明るい歌で子供たちの間でも「死んだはずだよお富さん」などの歌詞は大流行となりました。世の中は確実に変わりつつあったのだと思います。

お店から電車通り（私の追憶の中では鈴蘭通り）の方にパチンコ屋が一軒あったと思います。叔父は良くそこに私を連れて行ってくれました。今とは違いパチンコの玉を一つずつ手で取って、台の右にある穴に入れ、ハンドルで玉をはじくものです。やがて、自動的に玉が補充されるようになりました。ハンドルで玉をはじくのは従来通りでしたが、私は左手いっぱい玉をたくさんとり、左指で操作しながら一つずつ玉を入れる方がおもしろく、少しつつまらなくなっ

たと思っておりました。台をたたいて「玉が出ないよー」と叫ぶのは当たり前の場で、台のそかこしこでその様な場面が見られましたが、後に吉永小百合の代表作「キューポラのある街で」に同様の場面があり、懐かしく思い出しました。台の裏側ではあのように人がいてこのようなことをしていたのだ、と長年の謎が解けた思いもありました。とても景気のいい音楽、当時のことですから音質などは二の次でとにかく賑やかな音、お客さんの叫び声やチンジャラという音が入り混じった喧噪は相乗化し、おまけにタバコの煙はモウモウで、今の時代の良識では子供に決して良い環境とは言えないのですが、叔父とのパチンコ屋でのひとときは楽しく、父や母の世界にはない得がたい空間がこの一年間にはありました。それだけ思い出深い一年でした。

母の実家には、祖父 渡辺正吉、祖母 フミ、叔父 忠治、叔母 千江子、従兄弟 真男、が住んでおりました。真男君は生まれたばかりでした。その下に従姉妹の真千子がいますが、まだ生まれていませんでした。千江子叔母は母と私を引き受けて大変だったことと思います。

母屋はその当時の商家らしいたたずまいでしたが、それとなく慎ましい感じでした。各部屋をつなぐ廊下沿いに池があり、また、その対側の廊下に面して庭がありました。トイレは立派で、母が実家に立ち寄るたびに、ほんとにこの家はお便所が立派でと、冗談めかしてよく言うておりました。朝餉にはお味噌汁の匂いがたちこめ、その匂いをいまでも懐かしく思い出します。食事は仏間兼用の広い部屋でしたが、部屋のすぐ前には以前事務所として使用していた大きな土間のような部屋があり、奥の部屋は光が入らないため天井に明かり取りがありました。昔のことでしたので、一人一人にお膳（食台・一人前の食事をのせた台）がありました。私は味噌っかすです。私は当然端っこにおりました。ハエもたくさんいて、食台の上にはハエ取り紙がぶら下がっていました。遠くの上座では祖父がニコニコして、嬉しそうにこちらを見ています。

母は長女で忠治叔父は弟になります。その下にヨシ子叔母がおりました。ヨシ子叔母は腹違いの姉妹で、この話は長じてから母に聞かされ知っておりました。母が亡くなる直前に病院のベッドで私に昔語りをしました。母たちが小さい頃（母が5歳、叔父が2歳）実の母親（千嘉）が亡くなり、祖父が後妻をもらったこと。かなり気むずかしい性格だったようで、もう里に帰そうとしたときに、お腹の中にヨシ子叔母がいることがわかり立ち消えになったこと。母が父に嫁ぐとき、忠治叔父が母に「姉ちゃんはいない（いいなー）。外に出られっから（外に出られて）」と言ったとのこと、などです。実母を亡くした後、姉弟

が思いを同じにして助け合って暮らしていたことがわかりますし、叔父が母が病気になった際に私達を引き受けた気持ちが良いわかります。

しかし、祖母は愛想はありませんでしたが私には悪い思い出はなく、私にとって良い祖母でした。ヨシ子叔母は気持ちのやさしい人でした。そんなわけで私は家族関係に少しも違和感を感じていなかったのも、継母に育てられた母の苦勞は知らず、血はつながっておりませんが、私の中では祖母は祖母として定着しています。

さて、子供の頃は映画の他にラジオが娯楽番組でした。特に1953年1月5日から12月31日、月曜から金曜の午後6時30分～45分に子供向けに放送されたNHKラジオ番組「笛吹童子」は抜群の人気でした。室町時代応仁の頃の物語で、丹波国の満月城が舞台でした。丹波国はどこなのかわかりませんが、妖異にとんだ冒険活劇でしたので、丹波と聞くと今でも怪しく心が騒ぎ、満月が背景に現れるのですから不思議です。これは直ぐ映画化され、1954年4月から5月に公開されています。出演者は、萩丸・東千代之介、菊丸・中村錦之助、赤垣玄蕃・月形龍之介、桐の小次郎・大友柳太郎、胡蝶尼・高千穂ひづる、など、子供向けながら当時の東映ではそうそうたるメンバーでした。もっとも、後に萬屋錦之介と改名する中村錦之助にとってこの映画は映画初出演でしたが、この作品でスター街道をまっしぐらに駆け上るきっかけをつかんだそうです。

この映画はすぐ傍にある件（くだん）の映画館で見ました。第一部・どくろの旗、第二部・妖術の闘争、第三部・満月城の凱歌、の三部作でした。第一作が公開された後、週替わりで第二部、第三部が順次公開されたとのことですので、私はおそらく公開された毎に見たのだと思いますが、記憶に残っているのは三部作一挙上映でした。三部作一挙上映といっても合わせて145分ですから、今の映画一本分ぐらいの長さです。子供向けに区切って三部構成にしていたのかもしれませんが。三部一挙に見られるわくわく感は何物にも代えがたかったようで、タイトルロールにあわせて始まる笛吹童子の歌まで、映画館の情景が今でも鮮明に思い出されます。家内も高知の長浜の映画館で見たそうですが、髑髏のお面が顔に張り付いてはがれなくなるのが怖かった、と今でも申しております。

桐の小次郎役の大友柳太郎は他の東映作品でもしょっちゅう見ていたと思うのですが、あまり記憶に残る作品はありません。しかし、テレビドラマ「北の国から」（1981年10月9日～1982年3月26日）第15話で、孤独な老人を演じた大

友柳太朗（笠松杵次役）に久々に再会した時は、とても懐かしい思いでした。杵次が十八年間苦勞をともにした馬を手放した日、「アイツがオラに、何言いたかったか。信じてたオラに、何言いたかったか。」と五郎（田中邦衛）に切々と語るのですが、何と渋い味わい深い役者になったのだらうと、しみじみ感じました。明治45年生まれですから、父と同じ年に生まれています。辰巳柳太郎の弟子、緒形拳の師匠だったそうです。伊丹十三監督の映画「たんぽぽ」が遺作になりました。死の前日、伊丹監督に電話をかけ、自分の出番がすべて撮影済みであることを確認してから、自ら命を絶ったといわれています。明治人の律儀さを感じます。

1954年は第一作の「ゴジラ」が上映された年です。ご存じのようにこの映画は今でも製作され、シリーズ化されています。私がゴジラ映画を見たのは1955年（昭和30年）5月に公開された第二作「ゴジラの逆襲」が初めてで、第一作を見たのは随分後になってからでした。それともう一本、1952年にアメリカで製作され、1953年（昭和28年）に日本で公開された「宇宙戦争」。

この二本は私の夢の中にしばしば出てくることになり、私はひたすら逃げ回ることになるのですが、家内はゴジラと戦った夢を見ており、私とは随分違う展開をたどっておりました。

つづく

（藤田保健衛生大学客員教授、TML 代表）